

## 「現地を訪問して思うこと」

### 1) 応援ツアー参加の動機

私は1995年1月17日の阪神・淡路大震災の際、大阪府堺市にある特別養護老人ホーム在職中で、ホームに被災者数名を受け入れた経験がありました。2011年3月11日の東日本大震災の際は静岡県袋井市の特別養護老人ホームで働いていましたので、東北の被災者を受け入れる準備を進めるとともにホームの職員を現地に派遣しました。結果的にはホームへの受け入れ要請がありませんでしたが、職員や入居者家族を対象に救援募金・物資の提供を依頼し、集めて送る等の協力をさせていただきました。しかし、ボランティア活動を通して被災に会われた方々の傍らに立てればという個人の思いは実現できませんでした。その後、大阪に戻り、身体障がい児・重症心身障がい児者対象の病院に勤務していましたが、2年前に福島県での会議に出張した際、福島原発事故で汚染した土壌回収作業を見た経験しかありませんでした。この9月に退職できる目途がついた時、校友会誌に同封された東北応援ツアーのチラシを見、早速申し込み、被災現地を訪ねる願いを実現することができました。

### 2) 応援ツアーでの見聞

わずか2日間でしたが、各層に亘る年代の校友と共にバス、列車で被災地を回り、思いや祈りを共有できたことを感謝しています。以下、印象に残ったことを列記します。

釜石駅から盛岡まで三陸鉄道の「震災学習列車」に乗せてもらいました。三陸鉄道職員が同乗され、沿線の皆さんの津波襲来時の対応、震災時から現在までの復興状況、そして三陸鉄道の地域貢献の姿勢等、懇切丁寧に説明があり、また特に被害が大きかった地点では徐行や一旦停止、そして途中の駅で、亡くなられた方々の冥福を祈る黙祷の時間も設定されていました。そこには地域の住民に貢献し続けようという一つの企業のミッションや職員の誇りが十分感じられました。黙祷の時、私も亡くなられた方だけでなく、未だ行方不明の方々やそのご家族、そして被災から立ち上がれない方々、前途に希望を見出せない方々を覚えて祈らせていただきました。

陸前高田のホテルでの勉強会では校友4名から大震災の体験談を伺うことができました。自分の経営する工場を流され、やっと再建にこぎつけたられたが、人間は徹底的なダメージを受けた時は笑うしかない存在であること、被災後数ヶ月間、色彩感覚をなくしてすべてがセピア色に見えたある時、ショートケーキを見た瞬間に物には色があったんだと気付かされたと言われた大船渡市の水野様、大船渡市職員として被災直後から災害対策本部で寝泊まりし、自宅に帰れたのがようやく3月下旬であったこと、その後も復興計画に携わり、ついに健康を害し、昨年末には退職せざるを得なかった近野様、釜石市職員として津波時には市役所3階にいて、5千トンの船が陸地に打ち上げられる様、自宅を含めて多くの家屋や物が津波に呑みこまれる瞬間のスピード感を今も忘れられないこと、やっと市内に施設ができ始めたが住民はまだ3分の1しか戻っていない実情を語られた佐野様、陸前高田市の中央公民館長として最高996名のお世話をされた鈴木様の体験談に、改めて被災の生々しさ、そして、それぞれ立場は異なっても、個人的な犠牲を顧みず困難に立ち向う責任を負い続け、その職責を全うして今日まで歩いて来られたことに対し、頭を垂れるしかありませんでした。また、自分がその場に立たされたとしたら、果たして同じような行動ができたかどうか、そのような様々な思いが心の中で駆け巡っていました。

また、共通して語られたことは、自然災害が多い日本ではどこにあっても、日ごろから災害に対

する心の準備、必要最小限の生活用品の備えが必要であること、津波で亡くなられた方の多くが逃げ遅れであったこと、瞬時の判断が生死を分けるということで、心に残りました。、短い時間でも貴重なことを沢山学ぶことができましたので、今後ツアーが継続されるとしたら、この勉強会の時間をもっと長くすることを提案します。

2日目は陸前高田市の津波被災地(以前あった約7万本の松並木跡や学校跡等)をバスの車窓から見ることができました。

### 3) ツアーから帰って思うこと

復興に真正面から立ち向かっておられる住民の皆様の思いや体験からすると、短時間駆け足の見聞からの思いは間違っているかもしれませんが、被災された方々ひとり一人の考えを尊重し復興計画が進められているにしても4年8か月たった今、目に見える形での復興事業は始まったばかりのように私には思えました。これでは住民の皆様の心の復興まで果たして何年かかるのだろうか、前途の困難さを感じさせられました。

日本全体は今、世界の人々に復興した姿を見てもらいたいという政治家の思惑に乗せられた2020年の東京オリンピックに目を向けられています。しかし、被災地の一部でも見られたら、オリンピック関連事業に人も資材も被災地からもぎ取られている政治の貧困に怒りさえ覚えるのは私だけではないと思います。

それだけに、直接的なボランティア活動はできなくても、マスコミに対しても現状を伝える報道を継続して行うよう求め、また個人的にも東北の皆様との交流を絶やすことなく、その方々を覚えながら歩いていかねばと、思いを強めています。同じ企画が継続されれば、また参加したいと願っています。

最後になりましたが、この応援ツアーを企画し継続しておられる校友会事務局、そして現地で温かくもてなしてくださった岩手県校友会、ご多忙の中を時間を割き体験談を語って下さった4名の皆様に心から感謝申し上げます。